

「女性史からみた岩国米軍基地—広島湾の軍事化と性暴力」韓国語版の出版にあたって

訳者あとがき

ヤン ドンスク
梁東淑

本書は藤目ゆきの著書『女性史からみた岩国米軍基地：広島湾の軍事化と性暴力』（ひろしま女性学研究所、2010）を翻訳したものである。

岩国は昔から蓮根と海草が有名な天恵の自然豊かな土地であった。ところが穏やかであった土地は、旧日本軍の軍事基地にはじまり、敗戦後に朝鮮戦争を契機として米軍基地になり、韓米日軍事協力体制下では平和都市としての道をふさがれ、今は多くの事件と事故、環境破壊、数多くの米兵犯罪、性暴力によって、市民の安全と女性の人権が脅かされる都市に変貌してしまった。このような変化は、著者も述べているように岩国住民が望んだ未来ではなかった。

日本政府は今日まで岩国軍事基地の拡張を国策として推進してきた。岩国市民の願いとは異なり在日米軍基地の戦略拠点として半世紀以上にわたり拡大され続けてきた岩国の軍事基地化に対して、岩国市民は政府の画策をただ沈黙し傍観してはいなかった。2006年3月の住民投票で軍事基地化に反対する意思をはっきりと表明したのである。訳者は岩国市民が住民投票で軍事基地拡張および移転を拒否し自発的に活動する姿を、韓国人権映画祭を通じて非常に感動深く見たことがある。「これ以上の基地機能の拡大・強化はとうてい容認できない」という市民の勇気ある行動と選択は、日本はもちろん隣国である韓国からも非常に多くの人々の共感と支持を集めた。現在も多くの反戦平和運動家と女性人権運動家たちが岩国を訪問しており、アジアに平和と人権が尊重される秩序が作られていくことを願う人にとって、そこは沖縄とともに大きな希望を与えてくれる平和の都市のシンボルとなっている。

広島湾軍事三角地帯（広島・呉・岩国）に位置する岩国は、広島市の原爆ドームを頂点にして西側に位置する都市であり、東側には海上自衛隊と米軍施設が集中する呉、江田島が位置している。反核国際平和都市として三角形の頂点に位置する広島市の平和はこの間まさに底辺に位置した岩国や呉の軍事基地化によって担保された平和だったのだ。同時に岩国は韓国の釜山に非常に近い位置にあり、朝鮮半島有事に適応可能な在日米軍基地の戦略拠点として半世紀以上にわたって増強・拡大されつづけてきた。本書ではこのような岩国地域の70年の歴史を、女性と民衆の視点から見つめ、今までいかなる重要性も与えられないまま非可視化されてきた性暴力被害者の立場に焦点を置き、軍事基地化と性暴力の

関係について述べている。

日本の戦前戦後の社会状況において社会の底辺へと転落するほかなかった下層女性、そして基地周辺で複合差別を耐え忍びつつ生きねばならなかった在日朝鮮人女性など、徐々に広域化しつつある軍事基地化にともなう被害に関心を定め、彼女らに加えられる暴力や人権侵害の状況、またはそのような状況を容認した女性たち、あるいは被害女性を放置することで自身の社会的特権を維持しようとした大多数の日本人に向って、本書は省察的な批判を投げかけている。そして、このような日本女性史の濁流に逆らった女性たちの活動と生の片鱗をも探し出して歴史的意味を付与することも忘れていない。

また 2007 年 10 月に広島市で発生した岩国基地所属の海兵隊員による集団強かん事件（広島事件）の事件捜査と裁判過程を一つ一つ追跡し、女性の人権が日米地位協定と米軍犯罪をめぐる日米政府間の密約によって組織的に侵害されているという点を明らかにしている。さらに厳格に制限された条件で展開された米軍法会議一次裁判権の傍聴状況を通じて性暴力被害者の女性の人権は米国と日本のどちらの政府にとっても関心外の問題であり、したがって米国と日本政府は共同で性暴力を非可視化する政治を遂行していると捉えている。

...

駐屯国市民の日常空間を貫通して維持される米軍基地は、国際的な軍事基地反対運動において常に激烈な論争の対象であった。この間、米軍基地についての論議は主に軍事主権保護に関する政府の協議能力との関係で軍事統制力に強調点が集中していた。ときたま女性をシンボルとして使用する接近方法において女性の立場が扱われる事もあったが、米軍基地協定の実際の姿と運用を女性との関係で理解するという点では非常に不徹底であった。米軍基地をめぐる米軍人がどのように地域の女性住民と性的関係を結ぶのか、あるいは女性の人権と女性の安全についての社会的感覚がどのように変わるのかなどについての大衆的討論と調査は不在であった。さらに米軍の性暴力についての問いかけは副次的なものとなされ、国際戦略や軍事主権の侵害をめぐる質問と関連して論争になるのみで、この過程で介入するジェンダー政治の戦略的特性はたいていの場合消えてしまう。

このような状況において、性暴力被害者を中心に岩国米軍基地を批判した本書は、軍事化に介入するジェンダー政治の特性をよく示している。それは女性の政治的地平を広げることに役立つ。女性が米軍事基地と戦争に反対する重要な要因の一つは、軍事化の脈絡で発生する男性の暴力、とくに性暴力に対する警戒心であるはずだからだ。女性の立場から見ると、軍事化された状況と市民社会で発生する女性に対する性暴力は強く連関しているように見える。そのような連関性は不変の男性性の特徴というよりも、歴史的に形成された社会構造と権力構造の表現として理解されうる。本書はこの点で岩国の軍事基地化と性暴力の関連性を歴史的脈絡と複合的な社会関係の次元において理解する助けとなっている。

さらに本書は、軍事化と性暴力の関係性を単純な「身体の政治学」の観点からのみ扱ってはいない。米国中心の覇権的な全地球的資本主義・軍事主義批判と、新しい形態の帝国主義・植民地主義、そして階級搾取に関するより広い歴史的関心を包括している。つまりジェンダー関係の作動を認知しつつ、階級・民族・人種など多様な歴史的範疇を念頭においている。さらに女性の周辺化と政治制度において現れる過小代表性も感知され、国際的人権と女性の人権を弁護し、国際正義の発展を擁護する包括的内容をも含んでいる。このような政治的洞察力を土台に、国家と権力が意味するものと、権力そのものが作動する方式とを批判している。それによって日本という民族国家体制を貫通しようとした。このような志向は、戦争と軍事主義の只中に存在している女性、植民地状況にあって日本に渡らざるをえなかった貧困な境遇の在日朝鮮人など下層女性に注目し、彼女たちに女性運動の主導性を振り向けようとする努力からも垣間見られる。

このように本書は岩国米軍基地をめぐる見かけだおしの米日同盟関係の実体、その関係を維持する目的の土台としての軍基地の存在、基地建設の暴力的過程、基地によって被害を受けている住民と女性たち、地位協定の不平等性などの問題を具体的に扱っている。問題の頂点に戦前期から日本政府が堅持してきた一貫した軍事優先主義の原則が存在しており、米国に追随し日本市民の主権と女性の人権を放棄する日本の司法、行政、議会の実情が存在するという点も明らかになった。このような恥ずべき日本の歴史が戦後 65 年以上過ぎた現在まで持続しているにも関わらず、歴史的罪過と傷を埋めることも克服することもできない日本社会の現実無知に対しても本書は警告を送っている。

しかしこのような状況は決して日本だけの問題ではない。韓国近現代史においても以前から存在してきた、おなじみの議論でもある。もちろん異なる歴史的脈絡を持っているが、広く見れば日米軍事同盟および在日米軍基地化、それによって発生する犯罪と女性人権侵害問題は、韓米日軍事同盟へと進むための経路だという点で事実上大きく違わないと思える。現在の韓米日軍事同盟と軍事主義化は日本のみならず韓国社会でも急速に広がっている問題だ。日本で展開された軍事基地化と軍事化の効果が何であったのかを女性の視点からはっきりと語ってくれる本書は、日本社会のみならず韓国社会の未来に対する警告状とも感じられる。

韓国社会は 2011 年に駐韓米軍が犯した 10 代の女学生性暴行事件でそれをすでに経験した。解放後、米軍が韓国の地を踏んでから長い時間が流れ、その間韓国の安保という美名の下で米軍が数多くの犯罪を起こし、またその犯罪が隠ぺい・縮小されてきた事実は、実は昨日今日のことはなかった。韓国は今まで駐韓米軍犯罪者を拘束するどころか、まともな捜査さえできなかった。とくに米兵が犯した性暴行は女性にとってはもっとも悲惨な人権蹂躪だ。政府はこのような性暴力事件をめぐる韓米友好関係の毀損を憂慮した。ほとんどの事件でそうだったが、市民の基本権を保護する義務を持つ韓国政府が、外国軍の犯罪だという理由で女性人権侵害に無気力な対応をする姿は、最近の 10 年間の米軍性暴力事件のうち裁判権を行使したケースが約 16%に過ぎないという点と相まって、駐韓米軍犯

罪によって韓国市民が受けてきた被害をはっきりとさらけ出した。国家主権と女性の人権伸長が無関係でないということをよく示している事例である。

1992年のユン・グミ事件から20年、2002年のシン・ヒョスン、シム・ミソン事件から10年の歳月が流れた。二つの事件以降、長い間注目されてこなかった米軍基地と米軍犯罪は大きな関心の対象へと浮上した。存在さえまともに知られていなかった韓米駐屯軍地位協定(SOFA)は韓米関係の不平等性を表象する象徴として広く知られることになった。長い歳月の流れの中でそのような変化と出会うとき、より一層前進する希望が持てる。他方で不平等な韓米関係と軍事化へとすすんでいる現実、われわれが歩んできた道の曲折と行く手をさえぎる峠を越えるために流さねばならない汗の重さを考えさせる。

はたして2002年から2012年現在までに、韓国社会はどれほど変わったのか。被害者が被害に遭うに至った状況、被害者の恨(ハン)と悲しみはどれほど大きく改善されただろうか。被害者の立場から被害者の苦痛と怒りを理解し、支援・協力する女性運動の伸長はどれほど進展したのだろうか。現実を身近に見ているわれわれの心の苦痛も10年前とそれほど変わらない。韓国女性のみならず、アジア諸国からやって来た多くの女性までもが、まさにここ韓国で、韓国の軍事従属と性暴力、あるいは性搾取構造の二重の罨にはまっているという現実が、10年の歳月が作り出した違いといえは違いただろうか。

現在、米国の対アジア政策と南北関係は急激に変わりつつある。いまや駐韓米軍は北の挑発を防止するための存在から抜け出し、むしろ、朝鮮半島を出入りしながら、中国とロシアを潜在的な攻撃防御対象に包括する東北アジア迅速機動軍へと転換するという米軍再配置計画によって再配置されつつある。韓国の地が、岩国、沖縄の米軍基地のように米軍の東北アジア基地にされているのに、米軍の継続駐屯を前提にした米軍の駐屯環境保障のためにわれわれの主権と女性の人権を制限せねばならないのか。駐韓米軍が韓国を守りに来たという認識からは、これ以上の協定改正と女性の人権状況の改善から出発する平等な韓米関係の再定立が可能なのかどうか疑問である。軍事基地による女性への人権侵害の改善を図ろうとするなら、今から国際・国内次元での努力が同時に展開されねばならないだろう。平等な韓米関係の定立とこれに基づいたSOFAの全面的改正、そして米軍犯罪によって被害をこうむった女性を支援する女性運動が急がれる理由である。女性の生から軍事基地化によりこうむった被害の痛みを剥ぎ取り治癒させないなら、女性の人権の保障も完全に実現することはできない。

...

2003年夏だったと記憶している。訳者は韓国に留学していた同僚の日本人の紹介で、ソウルで藤目ゆき先生と初めて出会い挨拶した。その後2004年に、その友人と一緒に「女性・戦争・人権」学会に出席するため大阪大学に向った。当時、訳者は「性の歴史学」という先生と共有の関心事に没頭していた。それが契機となり今まで10年間、先生と交流を続け、縁を結んできた。世界女性運動、特にアジア女性運動に格別の愛情と関心があっ

て現場を直接フィールドワークしながらアジア各国で収集してきた貴重な女性史の本と資料に囲まれた大阪大学の研究室を、先生は今まで訳者が日本を訪問するたびにいつでも好きなだけ利用できるように研究室の鍵やコピーカードまで躊躇無く貸して下さる。

訳者は藤目ゆき先生と多くの仕事を企画し、ともに時間を過ごしながらか、お互いのことを知るようになった。2006年には大阪から東京まで同行して東京・大阪の性労働現場を見学し、東京の移住労働者団体や慰安婦歴史博物館を訪問した記憶も浮かんでくる。2010年には岩国米軍事基地の現場を歩き、軍事基地反対のための集会にもいっしょに参加した。そこで岩国市民と運動家たちに直接会うことができた。60才を越えたお年なのに情熱を尽くして活動されている岩国市議の田村順玄さんなど、みな忘れられない方々だ。本当の広島人との縁を通じて内面を磨き、広島というレンズを通して自分の反戦平和の思想と感覚、そして倫理のすべてを再点検しようとした1960年代日本のある文学者のように、訳者もまた度重なる岩国への訪問によって、新たに岩国の人々と出会い、その出会いを通じて最も新鮮な感銘を受けてきた。その時の経験が本書を翻訳する契機となった。そして昨年2012年に京都で開催された反核・反戦運動の会議参加につながった。

藤目ゆき先生との同行は日本でだけではなかった。2004年アジア女性学大会、2005年平和のための光州アジア女性会議、2006年米占領期韓日女性史国際シンポジウム、2011年米軍と性暴力をテーマとした韓日合同シンポジウム、このほかにも弥阿里・清涼里の性売買店の訪問、平澤の大秋里、梅香里軍事基地、基地村訪問など韓国でも常に行動をともにした。会えばいつも夜を徹して討論し、学界の動向と知識人の役割について討論した。時には最後まで沈黙しようと思っている軍事主義被害者たちの沈黙についても討論した。沈黙できる唯一の権利をもつ被害者たちの話に共感し、そのような多くの沈黙の物語が軍事主義に反対するための政治的発言のための資料、あるいは歴史資料としてだけ利用されるよりは、どのようにして自身を治癒し、自身の人間性を回復し、被害者でない一般人と同じ人生を自分の人生として迎えられるようにすることができるのか、そうできるよう私たちはどのように被害者に協力することができるのかをめぐってともに苦悶した。そんな共感の中で今はもう、これまでの人生についての話に泣き笑いし、残された人生をどのように生きるべきか、いつしか心の中まで打ち明ける肝胆相照らす関係になった。

訳者は藤目ゆき先生から学問的にたいへんお世話になった。しかし後輩であり同僚研究者である私に先生が見せてくれたお手本は、知的な面もあるが、むしろ倫理的な面でのそれだった。彼女の日常行動、事件や人と向き合う彼女のやり方を観察しながら、後に付いて反応しようという努力の過程でそのようなお手本は与えられた。いつも歴史をまっすぐに凝視し、矛盾と混乱を評価し、それによってより大きな正義とより大きな同情心ある未来のための提案を惜しまれなかった。彼女が見せてくれた倫理のお手本は、小さいけれども粘り強い希望を常に与えてくれたし、諦めないように力を与えてくれた。いつも感謝の気持ちばかりである。

日本語に熟達しておらず日本史についての知識が秀でているわけでもなく、さらに著者のように社会と歴史に関する深い洞察力と実践性に裏打ちされてもいない訳者がこの本を

翻訳するのは大変なことであるという事実を知ったときは、すでに翻訳契約をしたあとだった。けれども軍事基地化と駐韓米軍犯罪に反対する運動家と反戦平和運動団体、基地村のオンニと挺身隊ハルモニに連帯して女性人権の向上のためにまい進している韓国の女性運動団体に少しでも役に立ちたいという気持ちと、そこに藤目ゆき先生の同僚愛に応えようという気持ちとが合わさって、苦心しながら翻訳に努力を傾けた。結果は全然満足できるものではない。この本を読みながら感じるかもしれない問題点は、当然すべて訳者の限界と努力不足のせいだ。それでも、著者が伝えようとしている反戦平和と女性人権のメッセージを、読者のみなさんに無理なく読んでもらうことを願う気持ちは切実である。最後に常に藤目ゆき先生と訳者のあいだで通訳を引き受けてくださり、今回の訳書についての大変なアドバイスを惜しまずにしてくださった AWC 日本連絡会議の反戦平和運動家、永谷ゆき子さんに感謝したい。最後に、冬の時代である出版界の状況にもかかわらず、韓国と日本での反戦平和の歴史的運動と思想の継承、そして韓日間の学術、市民運動の相互理解と交流のために献身と努力を尽くしてくださっているノンヒョン出版社のソ・ジェドゥ社長にも感謝と尊敬の気持ちを伝えたい。

(翻訳 永谷ゆき子)